

2017年度 東京都女性活躍推進大賞受賞

シニアたちに 自信と笑顔が蘇ります

認定NPO法人 プラチナ美容塾 理事長 伊藤文子さん

大手化粧品会社を定年退職した伊藤文子^{いとうふみこ}さんは、これからは社会のために役立ちたいと、港区内の勉強会に参加、高齢者施設の傾聴などをしていました。そうして2年間情報を集めながら、最初は港区消費者推進員、シルバー人材広報委員、保健福祉委員として動き出しました。

その後、長年のキャリアを生かして、高齢者を対象に美容講習ボランティアを始めます。するとメイクを施した参加者が別人のように明るくなり、大変喜ばれました。その反応に手ごたえを感じたので仕事仲間だった同僚二人を誘い、平成26年(2014)7月に「NPO法人プラチナ美容塾」を立ち上げました。

「母が亡くなった時、そばにいられなかった後悔と無念がずっと残っていますね」。お母さまへの思いは、高齢施設のお手伝いをすることでお返ししていきたい。またこれから超高齢化社会を迎えても、シニア世代には明るく元気に過ごしてほしい。伊藤さんはそんな毎日のお手伝いがしたいと思っています。

多くの高齢者に楽しい人生を過ごしてほしい

港区立虎ノ門高齢者在宅サービスセンターで毎月行われている塾の活動では、ボランティアの人たちにまずハンドケアのレクチャーを行い、その後、ダイニングでマッサージやメイクを施します。シニアたちはこの日を待ち望んでいるそうです。

「定期的に高齢者施設を訪問していますが、みなさんが心待ちにしてくださり、またマッサー



胸に色布を何色か当てて顔立ちに似合うパーソナルカラーを見つける「1 day変身講座」



来館した人たちに美容を行い、話相手になる

ジしているとお互いの手に温もり以上の愛が伝わってきて、嬉しくて感動します」

伊藤さんはやっていて良かったと思うと同時に、この活動が生きがいになっていることを実感するそうです。

また高齢者の皆さんに素敵な笑顔を取り戻してあげたいと、平成27年(2015)から始めたのが「プラチナ写真館」。メイク、衣装、アクセサリーなどで1人ひとりをコーディネートし、変身した姿をプロのカメラマンに撮影してもらうというイベントです。

変身していく過程で表情が明るくなっていき、仕上がった自分の写真を見てうっとり。

「みなさんきれいになり、表情が良くなっていく。これがたまらなく嬉しくて、辞められません(笑)」と自ら楽しんでおられます。

会を重ねるごとに参加者が増え、男性も多くなり、時には抽選になることもあるそうです。



2017年度(平成29年度)、素晴らしい仕事で活躍した女性に贈られる「東京都女性活躍推進大賞」を受賞。今年は「認定NPO法人」取得。精力的に活動を続ける伊藤文子理事長

このほかプラチナ美容塾では、自分自身で若くきれいになりたい人への「セルフ美容」、眉毛デザインや目元のイメージをアップする「眉&アイメイク」、手、肩、背中中の疲れを解消する「カッサ健康美容」など、8つの講座を開催しています。

プラチナ美容塾がスタートして5年が経ち、活動内容もエリアも広がってきました。次は「東京2020大会」に向けて、たくさんのシニアボランティアを養成し、活動の場を作りたいと意気盛んです。社会とのつながりを感じ、役立つことは脳を元気にし、寿命も延ばします。

「素敵なシニアが活躍できる社会になってほしい。そのきっかけがきれいになること。明るく、楽しそうな様子にこちらも心躍ります。皆さんから感動と元気をいただくのでやりがいがありますね」と話す伊藤さんのパワーとバイタリティはエンドレスのようです。

取材・文：千葉みな子
写真協力：プラチナ美容塾



「プラチナ写真館」では大勢のスタッフが参加者の魅力を最大限に引き出し、変身した姿を記念撮影

Information

認定NPO法人 プラチナ美容塾
TEL 070-2187-8066
<https://platinabeauty.com>

歴史探訪

クリスマス・カードを描いた 浮世絵師・小林清親

小林清親(1847-1915)は16歳で勘定奉行御蔵屋敷小揚頭頭取の家督を継ぐと、慶応元年(1865)、将軍徳川家茂(1846-1866)の供として上洛。鳥羽伏見の戦の後に徳川慶喜(1837-1913)に従い、本所横綱町に帰還し、慶応4年(1868)、御蔵勤めに復帰した。明治2年(1869)、慶喜公の隠居に伴い静岡に渡ったが、明治7年(1874)に母と東京に戻り、絵で生きることにした。

背丈は6尺2寸(188cm)、剣術少々、1升酒を飲み、無口だが機知があり、始め本所界限に住み、隅田川を挟んで転々、明治14年(1881)から17年(1884)まで芝源助町12番地(東新橋1丁目1番地)、同町8番地に住むが、その後は江戸っ子らしく長屋住まいを含め何度も引越をしている。

光線画の浮世絵師

明治9年(1876)1月、版元松本平吉(？-1891)の注文で「東京五大橋之一両国真景」など伝統的浮世絵を描いた。

しかし同年8月から「東京新大橋雨中図」の欄枠に「VIEW OF RAINFALL ON^{NEW GREAT BRIDGE} SIN-OU-HASHI, IN TO-KEI.」と英文を入れた浮世絵を描き始め、日本にはない米国製の蒸気機関車が走る「高輪牛町朧月景」、夜景にぼんやりした光が灯る「新橋ステーション」、紅蓮の炎の火事を描き続けた「明治14年1月26日出火、両国大火浅草橋」といった火事場の連作など、文明開化の明治時代を水彩画の様な独自の表現で描いた浮世絵を創り出す。それと同時に、明治14年まで横浜芸術の真葛焼の影響を受けたような「猫と提灯」などの浮世絵を描いている。この時期の浮世絵は、とくに自らも「光線画」と呼び、彼の代表作になっている。

明治9年8月以降の清親の浮世絵の表現の変化はなぜ起きたのだろうか。

それは、横浜芸術の担い手である写真家下岡蓮杖(1823-1914)の知己を得たこと、キリスト教徒になった元江戸南町奉行所与力原胤昭(1853-1942)との交友に始まる。

原胤昭は明治7年(1874)にキリスト教文書、洋書輸入販売、楽器販売などの十字屋書



『新橋ステーション』／明治14年(町田市立国際版画美術館所蔵)

舗を旧銀座3丁目16番地に開設、次いで芝日陰町1丁目1番地(現新橋2丁目19番地)に十字屋支店梅吉を開設する。

明治8年(1875)、原は築地居留地にて女学校(現女子学院)を創設し、日本人主催のクリスマス会を開催したという。その後にクリスマス・カードを作るため、原は版元松本平吉に画工探しを頼む。するとその話は清親に届き、カードの絵を描き、さらに輸出用のカレンダー、ハンカチなどの図案を描いたという。

清親が光線画に目覚めたきっかけも原が関わっていたようである。米国製蒸気機関車を中心に描いた「高輪牛町朧月景」や「両国大火」などの描写は、米国の‘CURRIES&IVES’の石版画帖から影響を受けていると指摘されている。娘の哥津の回顧録の記述に「スケッチ帖はいずれも舶来の布仕立て、明治初年のものとしてはめずらしい出来のものであった。何だかこれも、貿易を手がけてみた原さんの手から清親へ渡ったような気がする。」とあることから、石版画帖も同様と推定されよう。

明治14年1月26日両国の大火を見に出た清親は、写生に夢中になった。その混乱の中で絵筆を除き、持ち出した錦絵書帖などを落とし失ったといわれ、米沢町1番地の自宅も焼失。恐らく石版画帖とともに創作意欲も灰塵と化したのか、これをもって光線画はほぼ終わりを告げる。

火事の後、十字屋日陰町支店の傍の芝源助町12番の柚木小間物屋2階に、翌年源助町8番地に引っ越している。

時局風刺挿絵師

清親は、引っ越しと同時に挿絵入り時局風刺雑誌の団団珍聞に入社。自由民権運動の高まりの中、徐々に活動の中心を浮世絵から風刺画に移すと、明治の時局批判を滑稽化する新聞挿絵に傾注していった。後に近代漫画・諷刺画史の五大作家のひとりに数えられることになる。

明治16年(1883)、原胤昭は福島事件の自由民権運動の志士に心惹かれ、その肖像画を政府「転覆」と掛けた「天福六家撰」と名付け、清親の名前を伏せ、画面中の角刻印に「はら+」(キリスト教を意味する印か／著者註)を入れて発行する。結果、原は警視庁に召喚され、肖像浮世絵発禁、軽禁固3月、罰金30円の刑を受ける。出獄後、原は免囚保護事業に取り組んでいく。

明治19年(1886)ごろには、小林清親は東京日日新聞、東京横浜毎日新聞、読売新聞などの挿絵を担当。明治22年(1889)ごろになると、銀座に暮らし、新橋芸者や代議士の肖像画を、明治24年(1891)には東京絵画学校



『高輪牛町朧月景』／明治12年(町田市立国際版画美術館所蔵)

の手本を描いている。

明治26年(1893)、二六新報社に入社。新聞、雑誌の挿絵が増える一方、翌年は日清戦争開戦を受けて、戦争画を30枚あまり版行している。労働組合運動は高まったが、明治36年(1903)、二六新報社を退社した。

清親の晩年

明治32年(1899)に明石、金沢へ向かい、34年(1901)は諏訪に、39年(1906)は弘前などを旅して画会を開いている。

明治37年(1904)、浅草公園花屋敷に絵葉書や扇子絵を売る小さなお店を開いた。清親画を家人で刷り込み、花鳥、景色、二百三高地髪型のヌードの立姿に黄色の蝶のとびかう図などを売っていたという。

明治41年(1908)千画会を開き、大正2年(1913)、諏訪から木曽路へ、翌年に京橋築地倶楽部で「清親百画頒布会」、大正4年(1915)、浅間温泉に行き帰京。同年、68年の生涯を終えた。

清親は独特の美を追求し、浮世絵『光線画』を創り上げ、その後、時局を批判する挿絵画家になったが、生涯、絵を心の友として、数人の弟子を育て、多くの浮世絵、肉筆画を描いた。

文：森明



『両国大火浅草橋 明治十四年一月廿六日出火』／明治14年(町田市立国際版画美術館所蔵)

参考文献

- 原胤昭著「小林清親兄の想ひ出」／季刊日本橋 昭和十年十月発行 日本橋研究会
- 小林哥津著「清親考」／素面の会
- 小林哥津著「父清親とその頃のこと」／日本古書通信第32巻第5号
- 黒崎信著「清親画伝」／松本平吉 昭和2年
- 練馬区立美術館・静岡市美術館編「小林清親 文明開化の光と影を見つめて」／青幻社
- 村瀬可奈・滝沢恭司編集「清親―光線画の向こうに」／町田市立国際版画美術館
- 吉田漱著「開化期の絵師 小林清親」／緑園書房
- 浅野秀剛著「明治十年の小林清親と松本平吉」／美術フォーラム21 2016 Vol.34
- 神奈川県立美術館編「神奈川県美術風土記」／有隣堂
- 佐波巨編集「植村正久と其の時代 第二巻」／教文館
- 原胤昭著「前科者は、ナゼ、又、行るか」／国立国会図書館デジタルコレクション
- 清水勲著「明治諷刺画史における小林清親」／日本の美術 368
- 太田愛人著「開化の築地・民権の銀座」／築地書館
- 山梨絵美子著「光線画の源泉」／版画芸術17

都市の寺院を訪ねる

芝増上寺大門通りと旧御成道の歴史探訪



特別に常照院内陣の入堂がかない、秘仏の「一光三尊阿弥陀如来」の御前立を間近に拝観



土と瓦を交互に積み上げて壁体とする構造の練堀



講師(建築家・伊坂道子さん)を中心に、話に熱心に耳を傾ける参加者たち(増上寺大門)

9月27日に行われた、「増上寺山内寺院の歴史と文化」をテーマとした「芝増上寺大門通りと旧御成道の歴史探訪」の講座に参加しました。講師は日本建築に造詣の深い建築家の伊坂道子さん、常照院ご住職の野村恒道さんです。

参加者は増上寺の総門である「大門」付近に集まり、伊坂さんよりツアーの説明を受けた後、港区役所芝地区総合支所に近い「常照院」へ向かいました。

慶長3年(1598)、増上寺の山内寺院となった常照院は、江戸時代は参勤交代の大名の宿坊となっていたそうです。常照院のご本尊である善光寺式の「一光三尊阿弥陀如来」は、葵の御紋のついた宮殿に納められています。この日は特別に内陣の入堂がかない、御前立の一光三尊像と内陣内部を拝観することができました。

ご住職の野村さんからは、ご本尊を目の前に、常照院の歴史や建築などの詳しいお話があ

港区では、2020年に向け、区内の文化芸術団体と連携した様々な「港区文化プログラム連携事業」を展開しています。この一環として、慶應義塾大学アート・センターが主催する地域文化の現場を訪ねる講座、『都市の寺院を訪ねる』のガイドツアー&レクチャーが芝地区で開催されました。この講座では、現代に受け継がれる建築や美術作品を通じて、寺院の歴史や文化を学び、現代都市で展開する寺院の有り様を体験し、都市文化の物語を読み解くヒントを得ることを目指しています。



七代目団十郎が寄進した「三升の紋」が掘られた石の水鉢

り、参加者の質問にも応えていただきました。

江戸時代は市川団十郎家の菩提寺でもあったので、境内には七代目団十郎が寄進した、市川家の「三升の紋」が彫られた石の水鉢が残されています。

その後は江戸時代のままの練堀に囲まれた「廣度院」に立ち寄り、旧御成道(日比谷通り)に面した「増上寺三解脱門」の前で伊坂さんよりお話を伺い、あっという間の2時間が過ぎ、解散となりました。

増上寺、そして周辺のお寺にも、様々な歴史の物語や、建築技術が生きつづけていることを、あらためて実感した1日でした。

取材・文・写真: 森田 友子

寺院が伝える都市文化の物語 — 妙定院の文化財 —



熊野堂外観

両土蔵とも
国登録有形文化財

浄土蔵外観



浄土蔵内部

9月29日、「寺院が伝える都市文化の物語—妙定院の文化財—」に参加しました。あいにくの雨でしたが、定刻には会場の妙定院本堂は満席になりました。まず慶應義塾大学アート・センターの挨拶の後、妙定院住職の小林正道師より「守ることと展くこと」—妙定院の文化財—というテーマでお話があり、寺の生い立ち、現在に至る変遷を知ることが出来ました。

次に、建築家伊坂道子氏より「江戸の建築の

扉をひらく」のタイトルで、戦禍を免れた土蔵造りの熊野堂(寛政8年(1796)建立)と、浄土蔵(文化8年(1811)建立)についてのご説明がありました。浄土蔵は、隣接する高速道路の振動の影響等により傷みが生じていたため、お堂の調査結果や内部に残された仕様書をもとに、平成17年(2005)より現在位置に、伝統職による忠実で丹精をこめた解体移築工事が行われた、との詳しい解説がありました。

その後3班に分かれて、伊坂氏による浄土蔵内部とご住職による本堂内の拝観、ご説明がありました。

最後に本堂で副住職小林倬道師、主催者の慶應義塾大学の國本学史講師によるまとめの言葉があり、皆さん満足されて散会しました。

取材・文・写真: 米原 剛
資料・写真提供: 妙定院



明治34年(1901)ごろの妙定院
(「大日本東京芝増上寺境内全図」より)

妙定院は宝暦13年(1763)、徳川九代将軍家重公を開基と仰ぎ、三縁山増上寺四十六世妙譽定月大僧正によって開山され、その名を採り増上寺の別院として念仏道場・学問研究の名刹として知られてきました。

当院の地は当時三縁山中の山下谷と呼ばれた所で、幽水閑雅、丸山の麓、赤羽川(古川)の清流は浄土を思わせる名所として、東京名所四十八景の一として人々に親しまれていました。



東京慈恵会医科大学附属病院通信・第1回

ただいま「新外来棟建築を中心とした再整備計画」が進行中です

2020年に向け、再整備と機能拡充を行っている芝地区の災害拠点病院「東京慈恵会医科大学附属病院」について、再整備の内容等を全5回にわたり特集します。

新外来棟建築を中心とした西新橋キャンパス再整備計画は、第一期工事として平成28年(2016)2月に2号館(臨床医局・講堂、平成29年(2017)7月竣工済)ならびにN棟(小児周産期センター・健診センター)の工事が着工し、年明けにはN棟2階へ新橋健診センター(現在は中央棟1F)が移転・リニューアルオープンする予定です。現在は第二期工事として旧大学本館跡地に新外来棟(仮称)の建築を進めており、2019年10月末に

竣工する予定です。その後、病棟・外来の移転作業を行ったのち、2020年1月に新外来棟ならびにN棟の小児周産期部門が一斉に開院することになります。

現在の外来棟は老朽化が進み、スペース的にも機能的にも十分とは言えませんが、新外来棟(仮称)は今回のリニューアルにより床面積が現在の1.7倍にまで拡張されます。特に1階は、約1,300㎡のオープンスペースを確保しており、アメニティ施設を集約するほか、公開講座やフロアコンサートを開催できるよう設計されています。またこの広いオープンスペースは大規模災害が発生した際には負傷者への緊急対応に使用します。2階は、中央検査部と画像診断部を配置し、各種検査を効率よく

受けられるようになります。3階から5階は主に各科の外来フロアですが、関連する診療科ごとにゾーニングするため、患者さんの利便性が一段と向上します。その他にも来院者動線とスタッフ動線が交錯しないよう、東西にスタッフエリアをまとめて機能的な建物となるほか、新外来棟とN棟を二層の上空通路と地下通路でつなぎ、ヒトとモノの効率的な動線に配慮した設計となっています。

ご来院される方々のさらなる利便性にも配慮し、スマートフォンによる患者呼出等、ICT(情報通信技術)の活用も検討中です。

N棟は、1階に小児・周産期の外来を配置し、2階は新橋健診センターと検査室、3階は周産期病棟(MFICU・母体胎児集中治療室を含む)、4・5階は小児病棟(NICU・新生児集中治療室/GCU・後方病床/PICU・小児集中治療室を含む)となります。

取材: 柴崎賢一、米原 剛

写真・資料提供: 学校法人 慈恵大学 西新橋再整備準備室

「新橋健診センター」移転のお知らせ

東京慈恵会医科大学附属病院に所属する「新橋健診センター」は、昭和23年(1948)より始まる長い歴史のある予防医学専門の医療施設です。現在、中央棟1階にある当センターが、新設されたN棟2階に移転することとなりました。規模は現在の約1.6倍となり、診断に不可欠な機器については最新のものを導入し、より内容の充実を図る予定です。

予防医学と聞いて、多くの方々が期待されることは、「病気が症状として出てくる前にその発症を予防すること」「その予兆を発見すること」「その対策をとること」「万一発生した場合にはなるべく早期に発見すること」などと思

います。当センターでは、以前から扱っている重要な病気はもちろんですが、時代とともに新たに顕在化した病気に対しても効率よく対応できる体制を心がけています。

具体的には、高次医療機関と同レベルの高性能な検査機器を早期に導入することで、全身の系統的な検査を行い、かつ短時間(約2時間)で実施できるシステムとしています。

さらに認知症などの重要疾患に特化した各オプションもご用意し、様々なご要望に対応出来るようにしております。当センターのある港区芝地区の皆様方の健康維持・増進に微力ながらお手伝いできればと考えています。



新橋健診センター診察待合ロビーとN棟入口のイメージ図



西新橋キャンパス再整備計画の全体図(イメージ)



新外来棟イメージ図

Information

学校法人慈恵大学 西新橋再整備準備室
西新橋 3-25-8
TEL 03-3433-1111 (代表)
<http://www.jikei.ac.jp>



芝地区 いきいき プラザ

地域交流編

今回は三田・神明・虎ノ門の3館で行っている地域交流について紹介いたします。

取材・文・写真：米原 剛

Information

芝地区いきいきプラザ3館では、様々な事業を通じて、地域とのふれあい、交流を進めているのも特徴のひとつです。ぜひ、直接3館においてなることをお勧めします。

三田いきいきプラザ

芝4-1-17 TEL 03-3452-9421

神明いきいきプラザ(プラザ神明)

浜松町1-6-7 TEL 03-3436-2500

虎ノ門いきいきプラザ(とらトピア)

虎ノ門1-21-10 TEL 03-3539-2941



●写真・資料提供 指定管理者：百葉の会・東急コミュニティー共同事業体

子どもとの交流

プラザ神明にはいきいきプラザのほか、保育園、子ども中高生プラザが併設されており、季節に合わせて交流行事を行っています。いきいきプラザと子ども中高生プラザは「いきいき×子ども交差点」と題して、定期的に交流をしています。

施設周辺の美化を目的とした掲示物を一緒に作成したり、年末にはカラオケ機械を使って、年末紅白歌合戦と題して、一緒に歌を歌ったりする機会を持っています。

地域の道端で、挨拶が出来るような地域にしたいという思いでおこなっているとのこと。



いきいきプラザの建物周囲の花壇に飾るためのガーデンプレートづくり

異文化との交流 エチオピアカフェコンサート

エチオピアってどこにあるの？からはじまり、エチオピアの食・音楽・衣装の文化を教えてくださいイベントが開催されました。

エチオピアの音楽は日本と似ているところがあり、私たちにも馴染みやすいとか。日本ではなかなかお目にかかれない「マシニコ」という伝統楽器で、日本とエチオピアの民謡を演奏してくださいました。おなじみの「♪ねんねんころりよ～」の江戸子守唄と、エチオピアの子守唄を披露していただきました。



ヒマラヤ小学校 絵画展

ネパールの小さな村に開校した貧しい子どもたちのための福祉学校「ヒマラヤ小学校」。その学校に通う子どもたちが描いた美しい絵画作品や子どもたちの様子がわかる「ヒマラヤ小学校絵画展」が開催されました。ネパールの子どもたちの笑顔を見ると、とても癒されました。



地域との交流

各施設にある喫茶では、茨城県の阿見町で採れた食材を使った料理を提供しています。阿見町の貸農園で栽培した野菜を定期的に収穫、配送してもらい、毎日提供しているメニューに取り入れています。



防災拠点として

いきいきプラザは、地震等災害が起こった時の区民避難所(地域防災拠点)に指定されています。各施設では、地域の皆さんと連携した、災害対応力を高める取り組みを推進しています。

避難所開設訓練セミナー



災害用のトイレの組み立て

芝の家・ちゃぶ台日誌 冬編



祝! 芝の家10周年「いろはにはへっ10誕生会」を開催しました。おなじみの方・懐かしい方など、大勢の方々が集まって、10年前の開室時を映像やお話で振り返り、おしゃべりを楽しみました。そしてまちの交流拠点の役割について改めて思いを馳せるひと時になりました。移転しても「みんなの居場所」でありつづけたいですね。

来場のみなさんが作った誕生ケーキ。材料は近所の方から寄付していただいた画用紙やリボンを使用。一番上には小さな芝の家があります。小学生や手しごと上手な方の協力のもとできた渾身の作です。



どなたでも自由に入出りできるまちの交流拠点「芝の家」には、日々近所の方から遠方の方まで、年代も赤ちゃんから学生、シニア世代の方まで、多種多様な方が立ち寄りそれぞれの時間を過ごしています。秋の「芝の家」でどんな時間を過ごしているのか、ちょっと覗いてみましょう。

なお「芝の家」は平成31年(2019)1月11日に3軒隣(芝3-26-8)に移転する予定です。



ご近所で「芝家具」を作っていた職人さんが、工房をたたまるということで椅子を譲ってくださいました。たくさん写真を撮ったり、お話を伺ったり、さまざまな出来事が印象に残った10月でした。

Information

芝の家
芝 3-26-10 (平成 31 年 1 月 11 日に芝 3-26-8 に移転)
TEL 03-3453-0474
開室日時：火・木曜日 / 11:00～16:00、
水・金・土曜日 / 12:00～17:00 休：日・月曜日、祝日

も芝の 老舗

江戸の^{かざり}鋳職人の技術と心意気

アトムリビンテック
アトムCSタワー

受け継がれる「ものづくり」の精神

江戸後期から明治にかけて東京や京都などの都会で、金くぎを一切使わない精巧な木工品「指物家具」が発達しました。多様なホゾ(継手)によって組み立てることを「さす」ということから「さしもの」は、江戸を代表する工芸のひとつとなり、多くの鋳職の名人が活躍しました。東の江戸指物、西の京指物と言われ、江戸指物は木目の美しさをそのまま生かした小粋でいなせな細工が特徴です。

創業者高橋良助は、江戸指物の金具職人として修業を積み、火鉢、鏡台、針箱、茶箆筒などに使用する、美しく繊細な細工を施す^{かざり}鋳金具を作り、明治36年(1903)に創業しました。大正5年(1916)には、高橋良助商店と称し、製造販売をはじめました。



新虎通りと日比谷通りの交差点近くに建つ「アトムCSタワー」。ギャラリーの運営と新橋の街づくりに関わっている峰島幹人さんにお話を伺いました

時代の移り変わりと共に、日本人の生活様式も変化しました。関東大震災や戦争という苦難を乗り越え、「鋳金具」から「住まいの金物」へと商品が変わっていきました。昭和28年(1953)に製造・販売された陳列用棚受「アトム1号」は好評を博し、1号に続いて2号、3号、重量用棚受、靴掛棚受、洗面受へと幅を広げ、建築金物部門の基礎を築きました。昭和46年(1971)には、110°開きスライド丁番を初めて国産化し発売。もともとドイツで生まれた丁番ですが、当時の社長が「近い将来、家具や住宅の工業化がさらに進み、それに対応できる丁番が必ず必要とされるようになる。よその国で造れるものが日本で造れないわけがない」と、日本の技術に対する確信から国産化に踏み出した画期的な出来事でした。

昭和45年(1970)以降は、日本の住宅を、安全

で便利で快適にしたいという思いから、クローゼットの扉などに使われる「折戸金具」や、省施工でバリアフリーにも一役買う「引戸金具」、ドアの位置の微調整が簡単にできる「調整機構付丁番」などが開発されました。

戸が閉まる手前でブレーキ機能が働き、静かにゆっくり閉まる「引戸ソフトクローズ」は、開け閉めの際の音を解消し、指挟みのリスクも軽減。上吊りのタイプなら床にレールがないので、バリアフリーで掃除も容易です。

平成12年(2000)、社名を「アトムリビンテック株式会社」に変更しました。社訓は「独り歩きのできる商品づくり」。一目でその価値が相手に伝わる商品を、そして消費者の生の声に応える製品開発を目指しています。

創業者の職人としての「ものづくり」の精神を受け継ぎ、現代に活かしていきたいという意思を込めて、商標の「ATOM」(原子)、つまりモノの始まりと「Living Tech(住まいの技術)」をつなげ併せ、Live in Tech(技術に生きる)の企業を目指しています。

近未来の住空間ギャラリー

新虎通りと日比谷通りの交差点近くに建つ「アトムCSタワー」は、近未来の住空間づくりをテーマにしたギャラリーです。ATOMブランドの内装金物を実際に目で見て触れて体感できるショールームと、金属デザイナーの創作作品とインテリアを販売するショップが併設されています。建築設計者やデザイナー、エンドユーザーに交流の場を提供し、彼らの生の声を製品開発に活かすことを目指し、昭和55年(1980)、芝家具産地として知られた旧芝田村町(現新橋)に、ショップ&ショールーム「亜吐夢金物館」を開設。



江戸を代表する工芸の一つ、美しく繊細な細工を施す鋳(かざり)金具のついた木工品「指物家具」の引き出し部分

近未来の住空間づくりをテーマにしたギャラリー。アトムリビンテック株式会社のATOMブランドを実際に目で見て触れて体感できるショールームと、イベントスペース、金属の雑貨とインテリアを販売するショップが併設されています

「折戸金具」や「引戸金具」など内装金物の展示フロア「亜吐夢金物館」。なかでも「引戸ソフトクローズ」はバリエーションも豊富



平成19年(2007)に「住空間創造企業」を目指した「アトムCSタワー」と名を変え、アーティストやクリエイターが集う空間を備えています。「CS」は、広くはCustomer Satisfaction(顧客満足)の意、そして「Circle(新規事業)& Square(既存事業)」の有機的結合の意が込められていて、それはビル自体の形状ともリンクしています。

アトムCSタワーでは、このような最新の金具商品を用いた住空間を実際に体感することが出来ます。まちに暮らす人々はもちろん、インバウンドのお客様や著名人も訪れるアトムCSタワー。日本国内のデザイナーによる斬新な作品も並び、心躍るものづくり空間が広がっています。

ギャラリーの運営担当者 峰島幹人さんは、お昼の休憩時間に外出すると「こんにちは」と街の人から声がかかるのが励みだとか。企業と街が二人三脚で未来に向かって進んでいる新橋エリア。新虎通り「新(New)」と「虎(Traditional)」のごとく「革新」と「伝統」が融合する魅力的な製品開発と街づくり。これこそ老舗の心意気なのです。



取材：森 明／早川 由紀

文：早川 由紀

取材協力(敬称略)：峰島幹人

参考文献：

「アトムリビンテック 100年のあゆみ」、

「110th Anniversary since 1903」、

「ATOM's history book since 1903」

すべてアトムリビンテック株式会社刊

「ATOMNEWS197 2017 Autumn」

アトムリビンテック株式会社 アトム CS タワー編集室刊

Information

アトムリビンテック株式会社

アトム CS タワー

新橋 4-31-5

03-3437-3673

ようこそ 芝へ！ 大門

芝のランドマーク

増上寺の総門である「大門」は、町名や都営地下鉄の駅名にもなり、その色から地元では「赤門」と呼ばれ親しまれてきました。慶長10年(1605)、増上寺とともに創建された木造の大門は、昭和12年(1937)関東大震災による痛手を修復するため、鉄骨鉄筋コンクリート造りに建替えられました。さらに昭和58年(1983)の修復工事、平成29年(2017)年には耐震補強などの工事も終わり、現在にいたります。

浜松町側から歩いてくると、大門から三解脱門、本堂が一直線につづき、背後に東京タワーが現れるようすは、芝を訪れる人なら誰でも歩きたくなる、定番の観光ルートです。木造の頃から受け継がれた「高麗門」という様式の大門は、歴史を語る芝のランドマークといえるでしょう。

浮世絵の中の姿

大門はこれまでに浮世絵や写真の世界にも、その姿を残してきました。歌川広重の「東都名所 芝神明増上寺全景図」では、江戸時代、現在の芝公園一帯が増上寺境内であった頃の大門の姿を知ることができます。芝露月町(現在の新橋5丁目)に生まれ、大正から昭和にかけて活躍した浮世絵師の川瀬巴水は、「昭和の広重」とも呼ばれ、日本各地の美しい風景を描きましたが、木造の大門の浮世絵を2点残しています。自転車が通り抜ける画と、かたや雪の降る中を自動車を通る光景です。浮世絵としてめずらしいモチーフを扱っていますが、時代背景が伝わってくる作品です。

巴水の画は海外での評価も高く、アップルコンピュータの生みの親であるスティーブ・ジョブスがコレクションしていたことでも有名です。大門の脇には、大門振興会から寄贈された、この浮世絵の陶板が飾られているので、ぜひご覧になってみてください。

里帰りした大門

時代が江戸から明治に変わり、増上寺の建物や敷地の一部は新政府のものとなり、明治6年(1873)には「芝公園」が開園。大門は芝公園の施



本柱・控柱・切妻屋根からなる高麗門

設の一部として管理されることになります。しかし平成28年(2016)3月、大門が東京都から増上寺に無償譲与されたことを契機に、増上寺による美化と改修工事が進み、ランドマークにふさわしい姿によみがえったのです。平成29年(2017)には、港区指定文化財に指定されました。

地元愛に支えられ

これまで大門の改修工事は、商店会や企業をはじめとする、地元の人々の協力に支えられてきました。それは「大門」が、地域の発展を左右する重要なシンボルであり、芝の玄関ともいえる存在だからです。増上寺とそれを取りまく芝公園、そして東京タワーは、港区の重要な歴史遺産であり、大きな観光資源です。美しく力強い姿に生まれ変わった大門は、これからも港区へ、そして芝へ、たくさんの人々を招いてくれることでしょう。

取材・文・写真：
森田友子

取材協力：
常泉幸雄



川瀬巴水
「新東京百景 芝大門之雪」
昭和11年(1936年)作
copyright © 2006 MINATO CITY. All right reserved

町会・自治会トピックス

虎ノ門三町会合同防災訓練が実施されました！ 虎ノ門三丁目広栄町会・虎ノ門四丁目町会・虎ノ門三丁目巴町会

10月13日(土)、西久保巴町児童遊園にて、虎ノ門三丁目広栄町会・虎ノ門四丁目町会・虎ノ門三丁目巴町会の三町会が、常日頃から良好な関係を築き、助け合い、協働して地域を盛り上げる活動の第一歩として「三町会合同防災訓練」を実施しました。

当日は、芝地区総合支所協働推進課・芝消防



署・芝消防団の協力のもと、「消火器使用法」「初期消火訓練」「AED試用学習」「防災心得教習」「会場内トイレ施設使用法」「マンホールトイレ設置訓練」「炊き出し体験」「芝消防署による消火器のデモ噴射」など数多くの体験型訓練を実施しました。参加者の皆さんは、真剣なまなざしながらも楽しんで訓練に取り組んでいました。また、かまどベンチを使用した、虎ノ門三丁目巴町会婦人部による「とん汁」がふるまわれました。訓練日は暗雲で気温が低かったため、温かいとん汁は大人気でおかわりする人も多くみられました。

三町会合同防災訓練は今年が初めての取り組みですが、今後もこのようなイベントを通して虎ノ門地域を盛り上げていきます。



平成31年度 港区民交通傷害保険に加入しましょう

港区民交通傷害保険は、少額の保険料で加入でき、車両による交通事故でケガをしたときに、入院や通院治療日数と通院治療期間に応じて保険金をお支払いする保険制度です。

また、自転車または身体障がい者用車いすの所有・使用・管理に起因して、他人にケガを負わせたり、他人の財物を壊したりしたこと等によって発生した、法律上の損害賠償を補償する「自転車賠償責任プラン」もあわせて募集します。平成30年度より「自転車賠償責任プラン」は最高保険金額を1億円に引き上げ、補償内容を充実させました。

自転車事故でも被害の大きさにより多額の損害賠償金を支払わなくてはならない場合もあります。いざというときのために「自転車賠償責任プラン」もあわせてご加入されることをお勧めします。

詳しくは、各総合支所で配布するパンフレットまたは港区ホームページをご覧ください。

※自転車賠償責任プランのみに加入することはできません。

■概要

- 加入対象者** 平成31年4月1日時点で港区に住所がある人
- 保険期間** 平成31年4月1日午前0時～平成32年3月31日午後12時
- 加入方法** 個人加入の場合

各総合支所協働推進課協働推進係または区内金融機関（銀行・信用金庫・信用組合・ゆうちょ銀行・郵便局）で配布する加入申込書にご記入のうえ、保険料を添えてお申込みください。

10人以上の団体加入の場合

各総合支所協働推進課協働推進係で、団体加入申込書にご記入のうえ、人数分の保険料を添えてお申込みください。

●加入受付 2月1日（金）～3月29日（金）

※金融機関での申込みは3月22日（金）までです。申込期間外のご加入はできません。

下記の6つのコースから1つを選んでご加入ください。

※複数のコースへのご加入はできません。

■コースの種類と保険料

コース	補償内容	年額保険料	最高保険金額
A	区民交通傷害Aコース	1,000円	150万円（交通傷害）
B	区民交通傷害Bコース	1,700円	350万円（交通傷害）
C	区民交通傷害Cコース	2,900円	600万円（交通傷害）
AJ	区民交通傷害Aコース+自転車賠償プラン	1,400円	150万円（交通傷害）+1億円（自転車賠償）
BJ	区民交通傷害Bコース+自転車賠償プラン	2,100円	350万円（交通傷害）+1億円（自転車賠償）
CJ	区民交通傷害Cコース+自転車賠償プラン	3,300円	600万円（交通傷害）+1億円（自転車賠償）

引受保険会社：損害保険ジャパン日本興亜株式会社

このご案内は概要を説明したものです。詳しくは、損害保険ジャパン日本興亜㈱東京公務開発部営業開発課（新宿区西新宿1-26-1）までお問い合わせください。

TEL 03-3349-9666（平日午前9時～午後5時）

お問い合わせ

芝地区総合支所協働推進課協働推進係

TEL 03-3578-3121

承認番号 SJNK18-09065 平成30年12月7日作成

旧町名由来板をご存知ですか？

新幸町

一説には、幸橋門外にあるので新幸町と名づけられたと伝えられています。もとは兼房町があった場所ですが、寛政6年(1794)の火災で類焼した後、久しく空地となっていました。嘉永・安政の間(1848～1860)に芝御霊屋御掃除人および医師三上快庵の屋敷が建ち、明治2年(1869)、これらの屋敷が合併して新幸町となりました。

二葉町

寛文(1661～1673)のころは幸町という町屋でしたが、幸町が元禄4年(1691)に北八丁堀に移転したため、その跡地は医師岡西朴立の薬草植付の拝領地となりました。宝永6年(1709)に徳川氏の女中の拝領地となり、土地の一部は再び町屋となりました。これはいわば草木が再び萌芽するようなものだということで、二葉町と呼ぶようになったと伝えられています。また一説には、享和年間(1801～1804)、徳川氏の女中、二葉の屋敷となったためともいいます。

日蔭町

明治5年(1872)、岡藩中川修理太夫および華族の相良頼基(もとは片桐久太郎)の屋敷地に名づけられた町名です。日蔭町は道幅がたいへん狭く日当りの悪い裏通りにあったため、俗に日蔭町と呼ばれていたことから、この名がついたと伝えられています。同年、日蔭町と定められましたが、徹底されなかったのか、いつのまにか日蔭町に戻っていたとのことです。

烏森町

烏森町は古くから烏村あるいは烏丸などと呼ばれた地域でした。江戸時代、しだいに武家屋敷が建ち並び、明治初年(1868)まで新発田藩溝口主膳正、武田大膳太夫、大溝藩分部若狭守、池田筑後守、小野桃仙院、井上俊良の屋敷でした。明治5年(1872)、市街地として起立し、町の中央に烏森神社があるので烏森町となりました。

明治42年(1909)、ここに開業した烏森駅は、大正3年(1914)に新橋駅と改称され、現在に至っています。烏森の名は今も新橋駅の烏森口などにその名を残しています。



Information

今回紹介した旧町名由来板の設置場所 **新橋2-7(SL広場前)**

買い物
するなら
地元の
商店街で

Going shopping?
Visit our local
shopping
streets.

●本誌の制作には以下の編集委員が参加しています
伊藤早苗／菊池弓可／桑原庸嘉子／柴崎賢一／柴崎郁子／田岡恵美／竹田和行／千葉みな子／町田明夫／森明／森田友子／米原剛(五十音順 敬称略)

●今後の発行スケジュールは次の通りです
2019.3(第50号)、2019.6(第51号)、2019.9(第52号)、2019.12(第53号) ※各号発行月の20日ごろ

芝地区地域情報誌の配布について

芝地区総合支所【芝、海岸1丁目、東新橋、新橋、西新橋、三田1～3丁目、浜松町、芝大門、芝公園、虎ノ門、愛宕】内の地域の方にお届けしているほか、地区内各施設などで配付しています

今年もやります

芝会議地域コミュニティ部会
イベント

芝を楽しむ会

芝でお酒が!?

平成31年3月2日(土)に芝地区の醸造酒を「知る」「見る」イベントを予定しています。時間や定員、応募方法など詳しくは2月頃「広報みなと」でお知らせします！

本誌に掲載した記事に出てくる施設などをまとめました。
ウォーキングマップとしてご活用ください。



港区芝地区総合支所協働推進課

〒105-8511 港区芝公園1丁目5番25号(港区役所1階)
TEL03-3578-3192 FAX03-3578-3180

ホームページ

<http://www.city.minato.tokyo.jp/>